

## 小林孝輔先生を悼む

1、小林孝輔先生は、平成16年11月19日、薬石の効なく、不帰の客として旅立たれた。享年82歳でした。先生は、憲法学者として、宗教法学会理事長の要職を10数年余の長きにわたり、惜しみなく尽くされ学会の運営・発展に寄与されました。

先生は、著名な進歩的憲法学者でしたが、他面、謙虚な宗教人でもありました。聞くとところによると、先生は、つつじが丘にある曹洞宗の名刹「金龍寺」(→成願寺)の長男として生まれ、後にその後継者として出家するべく同宗派の世田谷学園に学び僧籍を得ているとのことでした。ところで、大学への進学の時期になると、誰しものが、学ぶべき大学・学部等進学校を決めなければならない。青雲の志に燃える小林青年も、今後の道を選ぶことになったが、学問(法学)への道、止み難く、ご両親の期待にこたえることなく、早稲田大学法学部に進学された。

ところで、小林先生が宗教法学会の運営・発展のために尽くされたのも、若き日に修業した宗教に寄せる心が、内に秘められていたからであろう。私事になるが、先生は、仏教に関する造詣が深く、折にふれ、道元禅師の最古の道徳書とも評される「正法眼蔵」を中学時代に習った日の思い出や、道元の弟子の良寛が「正法眼蔵」を倉から持ち出して読み、感動し涙で「正法眼蔵」を濡らした逸話など話して下さった。元一粒社の社長が、一粒社名はアンドレ・ジイド(André Gide (1869~1951))の「一粒の麦死なずば……」からとったといたら、先生は、そうではなく、仏語の「一粒米イチリュウベの重きこと、須彌山シュミセンの如し……」からきていると教えられた。私はお陰で耳学問から知識を深めることができた。

2、思えば、初めて孝輔先生の警咳に接したのは、昭和29年頃、静岡大学に在職していた際、文理学部長の鈴木安蔵先生に来静された小林先生をご紹介された時である。両先生が学問や学界等の談義されている時、どちらの先生だったか、本を書かない学者は「走らない自動車みたいなものだ」といわれ、ジョークともつかぬ言葉を今でも覚えている。この比喩的な言葉を借りると、孝輔先生は、さしずめ「走り続ける自動車」「走り過ぎる自動車」といいうるであろう。先生の業績はぼう大であり圧倒される。ここでは、先生が新進気鋭の時代に書かれた代表的な書物をいくつか挙げ若き日の学績を偲びたい。

- ①社会科学としての憲法学（森北出版・1959年）
- ②憲法学の本質 — 憲法学および憲法学の研究（森北出版・1959年）
  - ①②は戦後初期の日本国憲法における憲法学研究方法論を説いた小林憲法学の真髄。
- ③基本的人権と公共の福祉（有斐閣・1959年）
- ④日本の憲法政治（日本評論社・1963年、憲法学は政治に無関心であってはならない旨を説く）。
- ⑤ドイツ憲法史（学陽書房・1980年、著者のライフワークであるドイツ憲法学研究の集大成である）。
- ⑥学生用教科書として、憲法通論（日本評論社・1964年）、⑦憲法学要論（勁草書房・1965年）等がある。

さらに、先生は、学外関係においては、たとえば、靖国神社公式参拝に反対する『政教分離の会』の代表者として論陣を張り、また、森喜朗元首相の『神の国』発言を違憲として主張した。さらに、天皇即位に伴う1990年の大嘗祭の問題については、『国事に関して行うことは憲法理論に反する』と説いた。先生は、生涯にわたり、憲法学者として自らの信念と良心を貫き、人権尊重、平和憲法擁護を基本にした憲法理論を説いた。先生は多くの業績を残しその碩学の生涯を閉じられた。

3、昔時の小林先生宅の庭には大きな桜の木が植えられていた。私はこれを見て、とっさに御夫妻とも桜がお好きなんだと推察した。先生のご他界後に、光子夫人が青山学院相模原キャンパスに山桜3本を植樹し供養された（写真）。

古くは、桜の花は「花は桜木、人は武士」といわれ、「敷島の大和心を人問わば、朝日に匂う山桜花」（本居宣長）と謳われているように、桜の花の美しさと武士の精神が重ねられ、日本人の魂の花であるという認識がもたれ、人々に愛されてきた。今日に至っても、「桜狩り」は春の行楽行事の一つとして欠かせないまでに多くの人々から愛されている。桜の花は万人の花である。

桜を眺めにきた人達にとって、このたび植樹された山桜の花も、過ぎし人々の姿や思



いを偲ぶよすがとなるであろう。また、「桜狩り」にきた人々も、自己の人生行路を振り返ってみることができるであろう。「さまざまな事おもひ出す桜哉」（芭蕉「笈の小文」）。

来春、桜の花の咲く頃、きっと山桜の木の下で、朋友とともに、酒を酌み交しながら、先生の面影を偲び、在りし日の思い出を語り合いたいと思う。小林先生安らかに眠り下さい。

散る桜 残る桜も 散る桜（良寛）

平成17年 8月25日

青山学院大学名誉教授 森泉 章

